

直通運転の利便性を考える

一橋大学鉄道研究会

はじめに

日本では、鉄道の直通運転が様々な形態で幅広く行われています。特に都市部において、近年もその数が増えつつあり、2015年3月の上野東京ライン開業や、2013年3月の東京メトロ副都心線を介した5事業者間での直通運転の開始は記憶に新しいところです。相鉄線とJR線・東急線を結ぶ連絡線の整備も現在進行系で進んでいます。

直通運転は様々な意図をもって行われ、鉄道事業者と鉄道利用者の双方に、様々なメリット・デメリットをもたらすものですが、このうち我々利用者にとって影響を与える要素は、総じて利便性の向上あるいは低下という形で立ち現れるといえるでしょう。人口減少社会に差し掛かりつつあるいま、鉄道事業者にとって、鉄道利用の利便性向上を通じて利用客を引きつけることが重要になっています。

一方でこの利便性は利用者にとって、主観的な形で知覚されるものです。例えばある直通運転に対して、「乗り換えが不要になったので便利になった」という意見もあれば「直通運転のルートは混雑しているので不便である」という声も考えられるでしょう。皆さんも、直通運転の開始と前後して、テレビ番組や雑誌において特集が組まれ、主に利用者へのインタビューを切り口に直通運転の評価が行われる様子を目にしたことがあるかと思えます。

それでは、直通運転による様々な利便性の変化は、実際のところどの程度利用者にとって重視され、その行動に影響を及ぼしているのでしょうか。この研究誌「直通運転の利便性を考える」ではこの疑問に答えるべく、定性的に語られがちな、一方で重要な要素でもある、鉄道の利用者側から見た利便性を研究対象の中心に据え、直通運転との関係性を定量的に解釈す

ることで、現在、そして将来の直通運転をより正確にとらえることを目標に議論を進めてゆきます。

具体的には、まず第1部において、日本における直通運転の形態を整理したうえで、その歴史と現状を俯瞰します。続けて第2部では近年の事例を取り上げ、直通運転の開始に伴ってどういった利便性の変化があったのかを中心に、その背景と結びつけながら確認してゆきます。第3部では、各事例を横断的に考察した上で、利便性を構成する各要素と直通運転の関係性について、実証分析を通じてより定量的な説明を試み、さらに将来の直通運転についても解釈を示します。

この研究誌が、漠然と捉えられがちな直通運転の利便性について、より詳細で具体的な部分を読者の皆様にお伝えし、直通運転のこれからを考えるきっかけとなれば幸いです。

一橋大学鉄道研究会 第54代部長